

●春日部市民文化講座（第16回）

「高山右近の茶の湯と信仰 —近々カトリック教会の福者として列福されることを覚えて—」

◆日時：2015年7月29日(水) 11時50分（ぽぽら春日部4階会議室）～12時

■高山右近の茶人としての証！

これから10分位で僕の話を読ませていただきます。皆さん、お茶を召し上がりながら聞いてください。高山右近の茶人としての証拠は、ほとんど歴史からは消されています。それでも消すことのできないものがあります。一つは茶室です。国宝『待庵』については高山右近が千利休から建築材の杉丸太の目利きを頼まれたという証拠の手紙があります。それは千利休の礼状ですが、これは小松茂美先生の論文の中で明らかになりました。もう一つは、兵庫県の滴翠美術館にある高山右近が削ったと言われている茶杓です。美術館の人でも高山右近作と言われる経緯が分からないのですが…。【写真：蔵出しの逸品 滴翠美術館高山右近作「共筒茶杓」 神戸新聞社 youtube より】



西山松之助先生という方が茶杓に関して調べられていて、彼の本の中に

「誠に清らかな茶杓である」と書かれているので、僕は直接お会いして「先生は何をもって清らかだとおっしゃるのですか」と伺ったら、「本当に捨てるべきところをきちっと削いで、そして共筒にも工夫がある。これは宣教師に贈ったものだろう」と、そして「花クルス」という名前を初めて彼が付けたのです。もう一つは、治部煮と牛鍋は高山右近が初めて出して流行らせた料理だと言えると思います。これには色々なエピソードがあります。それからもう一つ、これはお茶の世界ではトップクラスの道具なのですが、『佗助肩衝』という漢時代の名物茶入があります。これは堺の豪商・吸松軒佗助こと笠原十郎左衛門入道宗全が所持したところからこう呼ばれているのです。その人から高山右近の所に渡っているのです。



■高山右近の茶の湯！

何で高山右近が茶の湯と接触するようになったかという、織田信長に仕えていた荒木村重が高山右近の高槻城主の上に位置していたのです。荒木村重は信長に謀反を起こして逃げますが、高山右近は信長の所に留まります。茶の湯で千利休の弟子になれたのは荒木村重のお陰です。荒木村重というのは凄い文化人であり、武将であったと思います。だから、村重が山口に逃げたのですけれども、秀吉の世になると、彼は村重の才能を買って御伽衆の中に加えたりするのです。山上宗二が「山上宗二記」の中で「高山右近が『佗助肩衝』を所持している」と書いているのです。これが書見ですね。利休七哲という利休さんの7人の高弟について、利休から数えて四代目の江岑宗左という人が、三代目の宗旦から聞いて書いた『夏書き』に書いているのですが、一番は蒲生氏郷、二番目が高山右近というのですけれども、後の研究の中で明らかになるのですが、蒲生氏郷と家康が千家のお家断絶の危機にあつて、会津に幽閉されていた千少庵を京に戻す画策をしたということがあるので家元としては蒲生氏郷を一番にしたのです。でも、茶の湯の弟子としては僕の見ているところでは高山右近が一番ですね。そして高山右近が7人の弟子のうち5人まではキリシタンに導いてしまっているのです。

■織田有楽齋と高山右近

そして、織田有楽齋と高山右近の関わりの中で、言い伝えとしてあることは、織田有楽齋が凄いことを言っているのです。「彼は茶の湯では立派だが、清めの病にかかっている」という言い方をしているのです。これについて僕がずう〜と探っていて、最近になって解かった一つの証拠があったのですけれども、織田有楽齋が色々な事情の中で隠居して建仁寺の正伝院に自分の隠居部屋として『如庵』という茶室を造るのです。この『如庵』にはとても不思議な三角形の空間があるのです。この茶室を移設するために最初に壊した時に、先日亡くなった久田宗匠のお父様かお爺様が壊している所を見て、その三角形の空間から信仰物と言って、マリア像か、キリスト像かは分からないのですが、それがあつたということをお爺様かお父様から聞いたと久田宗匠は管理しているお坊様に言ったそうです。僕はそのお坊さんから聞いたのですが、そうした話が久田家から出ているのです。だから、私のお家元の而妙齋としては織田有楽齋のことを触れる時に、『如庵』というあの茶室名がどうもポルトガル語のヨハ

ネ、ジョアンであろうということに触れないではいられなくなったのです。彼は、講演の中で、書き物の中で最近の家元は、そのことに触れていますね。もっと突き詰めると、千利休の所持品として千利休400年の時にお家元が初めて出した『山姥文庫』です。エデンの園でエバが禁断の木の実を取ろうとしてる姿が推察されるものです。これはキリスト教では凄く大切なところで、罪を英語では original sin と言いますが、我々が罪人だよねという原点がエデンの園なのです。それが描かれている蒔絵の小箱を彼は持っていたのです。そういうものを千利休は持っていたのです。ですから千利休はキリスト教を知っていたのです。これはもう否定できないですね。



■千利休と高山右近に通じる「捨ててこそそのわび茶」

そして、今の「わび茶」が構築されていく中では、千利休一人ではなかつたろうと思うのです。色々な人たちがいて、高山右近などもいて構築されたと思うのです。高山右近はポルトガル語を読み書きできたのです。その証拠品は次回にします。それは何を意味するかというと、彼は当時のヨーロッパ文化を宣教師や色々な本を通して建築学とか土木学とか、さまざまなものを知っていたのです。そういう知識のある右近ですが、秀吉から追放されて前田藩の客将になるのです。秀吉からは「明石城を取るか、キリスト教を取るか」と聞かれた時に、「殿に明石城をお返しします」と言って返してしまうのです。千利休の茶というのは、自分の命までも秀吉にあげちゃった人でしょう。「お前なんか死んじまえ」と言われて「はい」と言って2畳か1畳半の茶室で死んでしまうのです。僕は1畳半の説を取るのですが、そこで切腹して首を斬られて彼の生涯は終わります。人生70、まさに70歳でした。高山右近も家康の代になって、「お前なんか日本人として失格だ」と言われて、宣教師並みに殺されはしなかったのです。それは家康にとって怖かったからです。豊臣を守ろう、大阪を守ろうとする西国大名が一杯いたからです。だから、右近が金沢から長崎に送られていく途中で何が起るか、家康も怖かったのです。殺したらクーデターが起るかもしれないので、徹底的に監視を付けて送りました。坂本という明智光秀の城跡がありますけれども、そこで1か月留め置かれるのです。その間、家康はこの右近をどう取り扱うのか、苦勞したのでしょうね。最終的には、大坂の下らせて船で長崎まで送られます。そして宣教師たちとマニラに追放される時に、小倉城にいた細川忠興が直接は会わなかったのですが、色々な好意を示したのです。その時のお礼状【写真:「日本訣別の書」】がこれなので



す。僕は名前もすべて置いていってくれども、忠興君、ぼくの60年の人生どう思う、「如何に」と言っているのです。高山右近は人生を総て捨てました。利休と同じように…。利休が何で1畳半の茶室を造ったかという、人生は1畳半あればそれで十分じゃないって、主客転倒で自分が1畳に寝て、誰かが「ああ、逝ってしまったあ！」と言ってくれる人が1人いればいいというのが1畳半の意味だろうと僕は思うのです。だから僕たちも、やがて1畳半の交わりの中でさよならだけが人生さ…。高山右近の「わび茶」というのは、捨てて

こそその人生であり、茶の湯なのです。見事に捨てているのです。利休と一致していますし、あえて牧師だから言うのですけれどもキリストと一致しています。でもね、利休さんはクリスチャンだったんだよ、何て言ったらダメなんですよ。証拠がなさ過ぎるのですよ。ただ物的証拠しかない。ただ、生き方として、あの戦国の時代に千利休も高山右近もそういう価値観を持っていたというのはやはり何かキリスト教の影響があったのだらうと言えますね。だって、7人の高弟のうち5人まで、有楽齋までジョアンという洗礼名を受けているんですからね。千利休がキリシタンのことを知らないであの「わび茶」を構築したというのは、僕は考えられないけれど、歴史というのはいつも為政者によって作られるのです。高山右近の持っていた茶入一つと城一つが同じ価値を持っていたのでからね。その茶入についても、江戸時代には高山右近でない人間が持っていたと名前が変えられているのです。高山左近になっているのですよ。キリシタンの高山右近なんて言うのは口が穢れる…なんていうことだったのかも知れませんが。茶の湯の世界でも、高山左近になっているのですよ。これがこの世の流れです。

この回は増村先生の盛り沢山のお話で高橋先生のお話は20分程度でしたが、「右近のわび茶」でした。